

140人が参加

建通新聞社

第3回新技術発表会を開催

建通新聞社は26日、国土交通省中部地方整備局の後援を得て、「第3回新技術発表会2014 in 名古屋」新技術・新工法の活用促進に向けて「てし」を名古屋市内で開催した。官公庁や建設会社、建設コンサルタントなどから140人が参加。8社（団体）が、国交省の



NETIS（新技術情報提供システム）に登録された新技術について発表した写真。

発表会の冒頭、中部地整企画部の野村正之機械施工管理官が国土交通省での新技術の活用について講演した。野村氏によ

ると、2013年度に新技術を活用した工事は全体の41・4%に上り、年々増加している。また、工種別ではコンクリート工が最も多く、仮設工と共通工が続いた。また野村氏は、新技術活用のイノベーションとして①工事発注時の総合評価での加点②工事成績評定での加点③設計業務での新技術の検討の3点を挙げた。

オ(ECO GEO)工のリスク軽減などを挙げ「法」▽日本植生が「グリットシーバー工」▽立基が「ハンドホール用配管取付の新工法・PL工法」▽日本SPR工法協会が「SPR工法」▽ハードロック工業が「ハードロックナット」▽ラファルトが「クラック抑制ラファルト塗膜工法」▽緑商事が「SEリバーズ」中性感対応型土質安定材グリーンアースシリーズ」についてそれぞれ説明した。

古河ロックドリルは、超低騒音仕様様油圧ブレイカによる解体のメリットとして、遮音シートや遮音壁の最小化、騒音への苦情による工事計画変更

のリスク軽減などを挙げた。エコジオ工法協会は、

砕石を使った同工法による地盤改良の特徴として、安定した品質や環境負荷の低減、土地の資産価値の維持などを示した。

植生護岸工法である、日本植生のグリットシーバー工は、NETISの推奨技術にも認定されている。同社は特徴としてコスト縮減や工期短縮効果を強調した。

立基のPL工法は、電線共同溝のハンドホールとFEP管の接続工法。同社は同工法の施工の簡易性や高い止水性などについて説明した。

日本SPR工法協会のSPR工法は、硬質塩化ビニル材を使った下水道の更生工法。同協会は、同工法の水密性や耐食性などの特徴を解説した。